

# 2024年度 葵メディカルアカデミー 理学療法科

## 実務経験のある教員による授業科目一覧表

科 目	時間数	年次	担当教員	実務経験を活かした授業内容
基礎理化学	60	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、人体を動かす筋肉について知ることを目標として、関節運動を理解するための基礎を学び、人体構造機能学演習へつなげて行く。
医療概論	30	1年	持田 誠	理学療法士として10年整形外科系病院で勤務した経験から医療と基礎医学の関連について学ぶ。また疾病の成り立ちについて理解するとともに、主な疾患についての概念を深める。
コミュニケーション論	30	1年	臂 貴紀	理学療法士として一般病院・訪問看護ステーション・デイサービスにて12年間の実務経験を活かした授業で、社会で必要とされるコミュニケーション能力と理学療法を学ぶなかで必要とされる基本的な文書作成について学ぶ。また一般的なマナーを学び実践しながら理解を深めていく。
情報統計論	30	1年	臂 貴紀	理学療法士として一般病院・訪問看護ステーション・デイサービスにて12年間の実務経験を活かした授業で、パソコンを用いた報告書を作成する能力を身につける。また、理学療法実践者として、先人たちの記述した論文や、検査結果の判定に用いられる基準値、基準範囲について学び、対象者の問題に側した情報を集め、知識を整理し、解決のための行動をとれるようにする。
基礎運動学	60	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、筋骨格・関節運動学などの基礎的知識から、人の基本的動作の構成、歩行、運動を継続する仕組みについて解剖学、生理学、その他の基礎医学での知識を統合して学習を進めていく。主に動作での関節運動の記載方法から支持基底面や重心の関係、力学的な分析を行う。
医療基礎統合論	60	1年	山野井 裕子	1年次に学習した各種人体構造学と各種障害学を統合した理解を図る。その中でも理学療法の対象として多い大腿骨頸部骨折について、整形外科としてだけでなく、総合的な医学としてする。また、疾患と患者の運動との関係、ひいては生活障害まで総合的に考える。理学療法士として病院・介護保険施設で20年間勤務した経験に基づき講義を行う。
人体構造・機能学Ⅰ	30	1年	持田 誠	理学療法士として10年整形外科系病院で勤務した経験から理学療法を行なうためには、人体に関する必要な知識を学ぶことは必要不可欠である。そこで本講義では、人体についての概観を理解した後、主な感覚系等のメカニズムを学習する。
人体構造・機能学Ⅱ	30	1年	小池 武則	人体には内臓器・血管・神経・骨・骨格筋などから構成されているが、それぞれの位置を知るために基準となるのは骨である。本科目では理学療法士として整形外科病院にて十二年勤務した経験から、理学療法士の視点で骨を捉えていく。また、理学療法士が対象とするのは運動であり、運動は関節で起こる。本科目では関節の名称および一般的な構造と機能についても学んでいく。
人体構造・機能学Ⅲ	30	1年	高澤 洋二	理学療法士としての18年の経験と一般病院・訪問看護ステーションでの実務経験を活かした授業で、神経系の構造から、正常な神経の機能や役割について理解を図る。脳の各機関の役割や局在性を理解し、運動と神経生理学のつながりを理解する。
人体構造・機能学Ⅳ	30	1年	山野井 裕子	人体構造（解剖）・人体機能（生理）の理解は、理学療法を行う上で必須である。この授業では、内部障害に関連する解剖学・生理学の知識を体系的に理解し、2年で学習する内部障害理学療法の知識に結びつけられるようにすることを目標とする。理学療法士として病院・介護保険施設で20年間勤務した経験に基づき講義を行う。
人体構造・機能学Ⅴ	30	1年	持田 誠	理学療法士として10年、整形外科系病院で勤務した経験から理学療法を行なうためには、人体に関する必要な知識を学ぶことは必要不可欠である。そこで、本講義では消化器・泌尿器系統を理解するとともに代謝の理解に努める。
人体構造機能演習	60	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、人体構造機能学で学んだ骨・靭帯・筋・神経・動脈について、模型のデッサンや触診技術を通じて、周囲の組織との位置関係をより深く学んでいく。また、触診を演習するに至っては、理学療法士としてのコミュニケーションの一端も学んでいく。

整形障害論	60	1年	小池 武則	理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から、臨床実習前に知るべき整形外科疾患について、病態・検査・治療法を関連付けて解説していく。
内部障害論	60	1年	山野井 裕子	内部障害とは身体内部の障害のことである。本授業では、理学療法を実施する際に必要となる内科疾患について学習する。理学療法士として病院・介護保険施設で20年間勤務した経験に基づき講義を行う。
神経障害論	60	1年	高澤 洋二	理学療法士としての15年の経験と一般病院・訪問看護ステーションでの実務経験を活かした授業で、各論として脳血管障害と神経筋疾患を中心にその病因・病態・治療・予後について理解を図る。
老年学	30	2年	持田 誠	理学療法士として10年、整形外科系病院で勤務した経験から理学療法を行なうためには、加齢に関する必要な知識を学ぶことは必要不可欠である。加齢とともに変化する身体機能、精神機能を整理し、疾患像をイメージできることを期待する。
リハビリテーション概論Ⅰ	30	1年	小川 紀子	医療・福祉の専門職である理学療法士として業務を実施するために必要な、リハビリテーションの理念、社会保障制度について理解する。また、理学療法を受ける患者や利用者の様々なニーズに対して対応できるように、保健・医療・福祉の各領域についての法制度の動向やサービスの内容を理解する。理学療法士として病院及び老人保健施設に15年勤務した経験をもとにした授業である。
多職種連携論	30	1年	小川 紀子	患者・家族にとって最適の医療を効率的に提供するためには、職種間協働にもとづく「チーム医療」の推進が必要である。講義では、医療の枠にとらわれず、これから健康・医療・福祉の専門職を目指すものとして、対象者を中心としたチーム医療の意義、多職種間のコミュニケーションの知識・技術およびその重要性を学ぶ。理学療法士として一般病院5年間、介護老人保健施設10年間の実務経験を活かした授業である。
生活環境論	30	1年	小川 紀子	生活環境は、障害の有無に関わらず人が生きていく上で最も身近で、基本的に存在するものである。障害者や高齢者が、回復・維持された身体機能を有効に活用するためには、社会的環境に広く目を向けることは重要である。生活環境論では、そのための基本的な理念と知識について学習する。理学療法士として一般病院5年間、介護老人保健施設10年間の実務経験を活かした授業である。
臨床運動学	30	2年	臂 貴紀	理学療法士として一般病院・訪問看護ステーション・デイサービスにて12年間の実務経験を活かした授業で、リハビリテーションの臨床現場では力学的に物事を考え、臨床意思決定を行う機会が多くあります。例えば動作の介助や誘導のキーポイントを考えたり、異常動作の原因を推論することが重要となります。そのため、臨床的に用いられる観察を中心とした運動分析、動作分析を講義を通して学習する。
理学療法管理学	30	3年	小川紀子	理学療法士は、院外、施設外に視野を広げ地域全体のリハビリテーションに関わる機会が多くなるため、その拠点となるリハビリテーション科の組織を強化していかなければならない。5年間のリハビリテーション管理職経験を持つ教員と臨床で働く現職管理職理学療法士を外部講師に招き、組織の能力を最大限に発揮させるための具体的な管理・教育について系統的に学び、リハビリテーション部門の管理について理解を深める。
理学療法評価学	60	1年	菊地 潤	理学療法士として整形外科病院、診療所にて15年間の実務経験を活かした授業で、理学療法の一連の流れにおける評価の位置づけを説明し、評価の意義・目的について理解する。評価方法の種類や主な検査測定項目を学ぶ。本講義では関節可動域測定、Danielsらの徒手筋力検査、四肢長・周径を中心に実施し、その検査の目的や結果の解釈について理解する。
理学療法評価学演習	120	2年	高澤 洋二	理学療法士としての15年の経験と一般病院・訪問看護ステーションでの実務経験を活かした授業で、理学療法の一連の流れにおける評価の位置づけを説明し、評価の意義・目的について講義する。評価方法の種類、主な検査測定項目、評価結果の記録・解釈について説明する。また、各種の評価結果を統合・解釈する方法を学び、疾患の症状について理解を深める。
理学療法評価技術論	120	2年	小池 武則	理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から、それぞれの障害に適応させた検査方法を講師によるロールプレイをもとに学ぶ。また、検査結果の解釈や、他情報との照合による患者像の把握、それをもとにした問題点抽出・目標設定を複数の症例を検討しながら学んでいく。

整形障害理学療法	60	2年	小池 武則	理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から、新入理学療法士として勤務する上で必要と思われる理学療法の展開法について授業する。具体的には整形障害領域の理学療法評価の意味と、理学療法プログラムの選択について、機能形態学・運動機能学の観点から説明ができるようになることを目的とする。
神経障害理学療法	60	2年	高澤 洋二	理学療法士としての15年の経験と一般病院・訪問看護ステーションでの実務経験を活かした授業で、解剖学・神経内科学で学んだ中枢神経疾患に関する知識を整理・再確認をし、さらに理学療法との関係や意義を理解する。また中枢神経障害病態生理を理解し、機能回復のための基本的な理学療法についての知識を身につけることを目標とする。
内部障害理学療法	60	2年	山野井 裕子	近年、生活習慣病を基盤とした内部障害系疾患は増加の一途をたどっている。内部障害は文字通り、その障害が外から見えにくいため、病態の理解が重要となる。本授業では、担当者が理学療法士として病院・介護保険施設に20年間勤務した経験に基づき、呼吸器・循環器・代謝疾患の病態を理解し、リスク管理を行いながら適切な理学療法を行えるよう講義を行う。
理学療法技術論Ⅰ	180	3年	山野井 裕子	理学療法士として病院・介護保険施設に20年間勤務した経験に基づき、必要とされる知識を総合的に学習し、臨床実習にて経験・関わることの多い運動器疾患や呼吸循環器疾患、脳血管障害、神経筋疾患について、その基礎医学や臨床医学に基づいて症状や現症や日常生活を理解する。それらの疾患についての評価方法や理学療法専門領域について理解する。また理学療法全体を通して観察や分析などに必要な力学的な視点や運動による生体反応を理解する。
理学療法技術論Ⅲ	180	3年	山野井 裕子	理学療法士として病院・介護保険施設に20年間勤務した経験に基づき、3年間の講義や臨床実習での学習を活かし、理学療法士として求められる基本的な資質・能力を理解し、社会と理学療法士の役割を理解する。また今後臨床で関わる疾患の基礎医学、臨床医学を理解し、それらの理学療法専門領域について考えることができる。
日常生活活動学	60	2年	小川 紀子	日常生活活動(ADL)は、障害者・高齢者が生活をする地域社会、在宅生活の環境の中でQOLに密接に関わるものであり、リハビリテーションにおける重要な概念である。その概念とQOLについて理解し、各疾患毎のADL指導の実践について理解を深める。理学療法士として一般病院5年間、介護老人保健施設10年間の実務経験を活かした授業である。
臨床実習Ⅰ	45	1年	小池 武則	社会人・実習生としての意識を高め、必要な態度や行動を身につけるとともに、小グループワークにおいて他者(学生間)・指導者(担当教員)とのコミュニケーション能力を高める。病院の機能・組織、チーム医療の中での理学療法業務(役割・責任)について理解する。理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から指導する。
臨床実習Ⅱ	270	2年	小池 武則	基本的な心構えを実践し、施設の職員とのコミュニケーションを通じ、チーム医療の中での理学療法業務の内容とその流れを把握できる。実習指導者の診療に参加し、見学や検査・測定体験を通して、臨床現場においてより一層の理解を深める。また参加症例の疾患・障害を考慮した適切な検査・測定を実施し、その結果から実習指導者が考える臨床的解釈・障害像を理解する。理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から指導する。
臨床実習Ⅲ	270	2年	小池 武則	実習指導者のもと、理学療法実施に際し倫理的・専門職の観点に立った責任について学習し、臨床における理学療法の実施に必要な資質及び実技を習得する。理学療法評価の見学・体験を通して、参加症例の疾患・障害を考慮した適切な検査・測定を実施し、その結果から実習指導者が考える臨床的解釈・障害像と問題解決に向けた仮説(目標設定・理学療法計画)を理解する。理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から指導する。
臨床実習Ⅳ	45	3年	小池 武則	地域に在住し生活をしている障害者、高齢者に対して理学療法の知識・技術がどのように活用できるかを、保健医療福祉における実施機関・施設(訪問リハビリテーション、通所リハビリテーション等)での見学実習を通して学ぶ。理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から指導する。
臨床実習Ⅴ	270	3年	小池 武則	実習指導者の指示・監督のもとで、参加症例が個々に有する問題を解決するための情報収集、理学療法評価、問題点抽出、目標設定、治療プログラム立案、治療の実施、治療効果判定という一貫した理学療法の体験ならびに必要な記録ができる。理学療法士として整形外科病院にて十五年勤務した経験から指導する。